

演習結果はスタンに移行した場合、面分割が類型的でなく、構成的で内容をもった美しさが多くみられる。特に側面が美しく無理のない処理になっていることから立体意識のステップアップとして評価したい。これを前の演習とジョイントして考察する。

緒言 今回は、次のステップとして二つの円錐形が組み合わせられた形を演習上の基本的条件として、この立体の表面上を面分割で構成する。(case study 1.) 次に case study 1 で表現された内容をデザイン・ソースとして、さらに複雑な曲面からなる立体(人体に近づいた形)の上に展開する。(case study 2.)

方法 case study 1. の条件・ 二つの円錐形を左図のように組み合わせ、上・下それぞれの円錐形の任意の位置に水平線を一本入れる。これを軸として直線または曲線によって面分割する。

Case study 2. の条件・ スタンを使用する。case study 1. の演習をひきついで、これを各自の条件とする。case study 1. 2 とともに無彩色で面をつくる。



演習プロセスにおける問題点と演習結果の考察

Case study 1. では二本の水平線の位置決定の時点ですでに立体の重心を求める範囲がある程度規制されるため、錯視的現象の説明と同時に、製作意図をあらかじめ整理させておく必要がある。case study 2. では、前の演習の発展として位置づけるため、スタンを人体としてみるのではなく、オーガニックなムーヴマンをもつ立体として理解させる。